

〔研究ノート〕

1856年パナマ・スイカ事件と「ラテンアメリカ」地域概念の誕生
— マクギネス『帝国の経路』(Aims McGuinness, *Path of Empire: Panama
and the California Gold Rush*, Cornell University Press, 2008) を通して —

佐藤 勘治

“The Watermelon Incident of 1856 in Panama,” and the emergence of the
concept of Latin America: a review of *Path of Empire: Panama and the
California Gold Rush*, by Aims McGuinness (Cornell University Press, 2008).

SATO Kanji

On April 15, 1856, in Panama City, a conflict occurred between some residents of the city and foreign passengers of the Panama Railroad, most of whom were from the United States. A gun battle started and at least seventeen people lay dead. Two were from Panama and most of the others were U.S. citizens. The event is called the “Watermelon Incident” after the first trouble between a drunken passenger and a Panamanian vender who sold him a slice of watermelon, which resulted in the above tragedy and U.S. intervention. This essay introduces “the Watermelon Incident”, based on the description of *Path of Empire* by McGuinness. The book describes the making of empire in Panama during the gold rush which was integral to and coincident with the Anglo-American conquest of California, and argues that the U.S. intervention in Panama during the 1850s contributed to a new concept of Latin America.

はじめに

「1856年パナマ・スイカ事件」とは、同年4月15日、ヌエバグラナダ共和国の北辺の地に当時位置していたパナマ市のパナマ鉄道駅および隣接地域において、地元住民とパナマ鉄道の米国人乗客との間に生じた争乱である。全部で17名（パナマ人2名、その他ほとんどが米国人）が犠牲になったほか、前年に全線開通したパナマ鉄道の駅舎や周辺の米系ホテルに物的被害が生じた¹。この事件は「1856年パナマ暴動」と呼ばれているほか、その発端が道端の果物スタンドで売られていたスイカ一片の支払いをめぐる争いとされているため、英語表記では「スイカ戦争Watermelon War」や「スイカ暴動Watermelon Riot」、スペイン語では「スイカ一切れ事件El Incidente de la Tajada de Sandía」として知られている。

同事件は、パナマでは、パナマ建国前史における最初期の民衆蜂起として現在位置づけられている。この小論がその内容を紹介検討するマクギネス『帝国の経路：パナマとカリフォルニア・ゴールドラッシュ』は、米国史における「ボストン茶会事件」と似た意味をもつとしている（p.2. 以下、『帝国の経路』に依拠した場合、本文中にページ数のみを記す²）。米国は、この争乱に対応して戦艦を差し向け、パナマ湾に待機させた。同年9月19日から22日には、暴動発生の可能性があるとして戦艦から兵員160名が上陸してパナマ鉄道の駅舎を占拠した。こうした軍事介入は、独立（1903年）までに、13回発生した（p.3）。独立後も続く米国によるパナマ軍事介入リストのほぼ最後尾にあるのは、いうまでもなく、1989年米軍パナマ侵攻である³。

題名にこの事件を示す用語が現れないものの、『帝国の経路』には、ほぼ全体を通して「1856年パナマ・スイカ事件」が描かれている。この小論の前半では、『帝国の経路』での記述を追いながら、「1856年パナマ・スイカ事件」を紹介する（第1節から第3節）⁴。第4節では、この事件と「ラテン」アメリカ

1 事件から4年後の1860年、万延元年遣米使節団がパナマ鉄道を經由して日米和親条約批准書交換のためにワシントンに向かっている。このときの随行員が書き残した鉄道乗車記録を読むことができる。なお、使節団の復路は、インド洋経由であった。1860年には、治安の悪化を理由にして米軍の占拠事件がおきている。

2 同書が参照している資料の多くは未見である。参照したものについては、脚注で示した。

3 John Lindsay-Poland, *Emperors in the jungle: the hidden history of the U.S. in Panama*, Duke University Press, 2003, pp.16-17.

4 日本語文献では、寿里順平『中米＝干渉と分断の軌跡』東洋書店1991年、53-54頁が言及している。

概念誕生との結びつきについて、マクギネスの立論を紹介し検討する⁵。

小論の目的は、日本であまり知られていないヌエバグラナダの一地方史を紹介することだけにあるのではない。『帝国の経路』の意図も、そこにはない。同書が指摘するように、米国の帝國的拡大は、米メキシコ戦争、膨張主義で語られる西部征服とその終わりを象徴する1890年「フロンティアの消滅」までの時期と1898年米スペイン戦争以降のカリブ海、太平洋への進出の時期に二分されて論じられる傾向がある。パナマは、後者以降の海外展開の時代に米帝国史に登場することがおおい。同書では、ラフィーバー Walter LaFeber 以来の研究動向をふまえて⁶、19世紀半ばゴールドラッシュ時から語られなければならないとしている。同書は、「パナマ・スイカ事件」の分析を通して、パナマにおいて帝国が形成 (the making of U.S. empire in Panama) されたと結論づけている (pp.185-6)。この小論では、単なるパナマ史を超えて、同事件があらためて注目される理由を、同書の記述を中心に論じたい。『帝国の経路』は、コーネル大学出版会のシリーズ「世界のなかの合衆国」の一冊として出版された。同書の重要性は、この事件をパナマ一國史の枠を越えて帝国としての米国拡張史の中に位置づけること、さらには「ラテン」アメリカという地域認識の成立に新たな視点を付け加えていることにある。

この小論では、同書について、章構成を示し、章ごとに内容を要約して批判的に検討するという一般的な書評の体裁をとらない⁷。細分化された研究状況の中、パナマ史研究にはじめて接するものとして、まず事件そのものに注目したいからである。同書は、事件に関わった人物や当時のパナマ市の政治、社会、経済状況を多角的な史料調査で細部まで明らかにしている。また、一見小さく見える歴史的事件を通して、米帝国史の大きな流れを論じる方法は、19世紀後

5 この事件については、米国側調査報告書に基づく記述が以前から知られていた。たとえば、E. Taylor Parks, *Colombia and the United States, 1765-1934*, Duke University Press, 1935, pp.221-224. 最近では、Mercedes Chen Daley, "The Watermelon Riot: cultural encounters in Panama City, April 15, 1856," *Hispanic American Historical Review*, Vol.70, No.1, 1990がある。

6 Walter LaFeber, *The new empire: An interpretation of American expansion, 1860-1898*, Cornell University Press, 1998. ただし初版は1963年である。

7 章構成は次の通り。プレリュード：1856年4月15日／序論：ルーズリーフの資料館で／第一章：パナマのなかのカリフォルニア／第二章：パナマ鉄道とゴールドラッシュの征服／第三章：地峡の統治権／第四章：「俺たちが今いるのは合衆国じゃない」／第五章：米帝国とラテンアメリカの境界／結論：歴史博物館での会話／コーダ：目にほこり。

半から20世紀初頭における米メキシコ国境地域史を研究してきた筆者の課題でもあるからだ。

1 「1856年パナマ・スイカ事件」

『帝国の経路』では、「プレリュード」と名付けられた冒頭の章で事件の概要が示されている (pp.1-3)。この節では、「プレリュード」とともに以降の章の内容も参照しながら、不明な点も含めて事件の全体像を紹介する。

1856年4月15日、コロンColónに、蒸気船イリノイ号で乗客千名ほどが到着した。大西洋岸の町コロンは、パナマ鉄道の起点となる会社町であり、創業者の名からアスピンウォールAspinwallとも呼ばれていた。乗客らは、同日午後には、パナマ鉄道を利用して太平洋岸パナマ市の近郊にあった終着駅に到着した (p.126)。全長76キロを4時間で横断するパナマ鉄道は、前年の1855年に全線完成したばかりであった⁸。カリフォルニア行きの船がパナマ湾の沖合にすでに待機していたが、干潮のため、はしけ船トバゴTobago号が出航できなかった。駅構内にとどまる乗客もいたが、中には、橋を渡ってパナマ城壁の外に広がるアラバルArrabal (「町外れ」の意味) 方面に散策するものもいた。

当時のパナマ市は、本来の市街地とアラバルという二つの地域に分かれていた。市街地は、城壁内intramurosとも呼ばれ、三方が海に面し、ほぼ四角形で一片が500メートルほどの小さな地域である。商人、地主、高級官僚などの白人のエリート層が主に住んでいた。現在、カスコ・ビエホCasco Viejo (旧市街の意味) と呼ばれ、世界遺産に指定されている地区である。いうまでもなく、海賊の攻撃に備えることを目的にした堅牢な石造りの建物が密集していた⁹。一方、アラバルは貧しい有色の人々が多く住む地域である。アラバルを挟んで駅舎から1キロほどの距離に市街地をまもる城壁があった。40年代末の人口は、合わせて4000人、うち城壁内には1000人ほどだったという (p.25)。ただし、次節で見ると、カリフォルニア・ゴールドラッシュ以降、パナマ市とその近郊は激変し、人口も増大した。

8 Fessenden Nott Otis, *Isthmus of Panama*, Harper & Brothers, 1867, p.139で時刻表を参照した。この書籍は以下などで全文参照可能。

<https://archive.org/details/isthmusofpanamah00otisrich> (2017年1月4日閲覧)

9 パナマ地峡は植民地時代から、ペルー副王領とスペイン本国を結ぶ貿易路として、太平洋とカリブ海を陸路としては最短ルートで結んでいた。モーガンの襲撃 (1671年) で、旧パナマ市は壊滅された。1673年、現在の場所に再建された。

1850年ころのパナマ市と近郊



McGuinness, *Path of Empire*, Map 5, p.104などをもとに作成した。

午後6時ころ、駅舎とアラバルを隔てる橋の向こう側の路上でスイカを切り分けて売っていたルナ José Manuel Lunaと駅舎からやってきたと思われる3、4人の乗客との間に小競り合いが生じた。争いは次のように始まった。酔っばらっていたひとりの乗客がスイカの一切れを手にとったため、ルナは代金1レアル（米通貨10セントに相当）を要求した。よっぽらいの乗客は、食べ残しを地面に投げ、代金を払わずに立ち去ろうとした。ルナの証言によれば、追いかけて代金を要求したが、下品な言葉を投げられた。ルナは、「気をつけろ、ここは合衆国ではないぞ。金を払え」と返答した。米国人は、拳銃を取り出して「銃弾で払おうじゃないか」と脅したため、ルナはナイフを取り出した。このやり取りは英語でおこなわれたと、ルナは証言している¹⁰。代金は、結局、同

10 この証言は、*Gaceta del Estado*, 26 abril, 1856からマクギネスが引用しているものである。ウェブ上でスペイン語原文を確認することができる。原文は次のとおり。“Cuidado, que aquí no estamos en los Estados Unidos: págame mi real i estamos al corriente...”
<http://portal.critica.com.pa/archivo/041999/opi2.html> (2017年1月4日閲覧)

行していた別の乗客が払った (pp.128-129)。マクギネスの資料調査によって、ルナは、1851年の市議会選挙で自由党候補に投票したことが確認されているほか、1853年の選挙人名簿に名が記載されている住民であった。このことは、ルナが読み書きができたことを意味する (p.127)。

マクギネスは、スイカ代金を払わなかった人物について、資料上、名前や国籍を確認できないとして、「よっぱらいの乗客」と記している。しかし、一般には、直後に出されたサンフランシスコの新聞報道に依拠して、この人物の名はジャック・オリバー Jack Oliverとされている。マクギネスは、パナマ政府が主催した150周年記念式典 (2006年) に参加した際、ルナのスイカ・スタンドが各所に再現されていたと報告しており、さらに自らがジャック・オリバー役を割り当てられ演じた経験を記している¹¹。この事件が語られるとき、現在でもマクギネスが不確かだとする名前ジャック・オリバーが言及されている (pp.129-130)。

言い争いは、次のような経緯をたどって争乱へ発展した。口論を見ていたアラバルの住民ミゲル Miguel Habrahan (ペルー出身) が酔っぱらいに飛びかかった。取っ組み合いをして銃を奪い取ると、小さなみすぼらしい家々がある迷路のような地域シエナガ La Ciénaga に消えた。米国側調査記録によれば、ミゲルは乗客に向けて発砲したとされている。シエナガとは湿地帯のことで、駅舎近くの海岸に面する一帯である。海岸には地元民が操作する小型ボートのはしけ船が置かれていた。 (p.106)

危険を知らせる (本来は火事を知らせるもの) 教会の鐘の音が打ち鳴らされたため、シエナガに数百人が集まり、乗客と住民との間で殴り合いが生じた。乗客たちの多くは駅舎や会社所有の大型はしけ船トバゴ号に逃げ込んだ。さらに、アラバルの住民たちが、駅舎の外に集まってきた。中には、城壁内から駆けつけた知事や警察官もいた。アラバルの住民たちと駅の中の乗客たちとの間で言い争いがあった。その後、どちらからかははっきりしないが発砲があり、撃ち合いとなった。米国側主張ではパナマ人からの発砲だとされている。パナマ側の主張では、パナマの知事が乗客からの発砲を機に、周りからの指摘に応

11 このエピソードはパナマ「建国神話」にこの事件が組み込まれていることを示している。パナマ独立 (1903年) をパナマ史としてどのように論じるかはパナマ国民にとって重要である。興味深い問題であるが、本稿では、パナマ人研究者によるパナマ史研究について検討していない。

えて応戦の命令を発したとされている。結局、翌朝までに、乗客が15名、パナマ人2名が死亡し、負傷者も多数に上った。そのほか、パナマ鉄道会社の建物に被害、乗客の荷物の略奪、米系ホテルへの被害もあったとされている (p.137)。

事件の細部は不明である。事件の始まりについても、スイカ代金だとする以外の証言も『帝国の経路』は紹介している。たとえば、米国人がパイナップルを女性の売り子から略奪したため、付近の住民が女性を守ったのがきっかけだったとするものがある。この場合は、ジェンダー的視点からの分析も必要だとマクギネスは指摘する (pp.135-137)。

2 1856年ごろのパナマ市：「ここは合衆国ではない」

事件のきっかけとなった無礼な振る舞いに対するルナの発言「ここは合衆国ではない」は、当時のパナマ住民の米国人乗客に対する怒りや不安の心情を象徴的に表している。米国からの乗客は、パナマ市にいるにもかかわらず、あたかも自国内にいるかのように振る舞っているとルナは認識したのである。その発言は、多くの住民の共感を呼んだに違いない。

ひとつの偶発的いさかいが、アラバルの庶民を中心としたパナマ市の住民多数を現場に向かわせ、最終的に両者に犠牲者を生むことになった背景には、ゴールドラッシュ以降、米国人の経由地となったパナマ市の急激な社会経済的変化があった。1849年以降、パナマ地峡はカリフォルニアにわたる主要な経路のひとつとなり、多くの米国人が押しかけた。『帝国の経路』は、パナマ鉄道こそが最初の「大陸横断鉄道」であるとあえて指摘し (pp.5-6)、パナマ鉄道はパナマにおいて帝国を形成したと主張している (p.188)。

カリフォルニアを目指すルートは多様だった。この節では、パナマ経由がどのような位置を占めていたのかを確認したうえで、「ここは合衆国ではない」をそのまま章題に掲げた第4章を中心に、同書2章と3章も参照しながら、ゴールドラッシュが引き起こした「パナマ・スイカ事件」の要因をまとめよう。

米国東部からカリフォルニアへの経路

米国東部からカリフォルニアへの経路として第一にあげなければならないのは、幌馬車を仕立ててワイオミングのサウス・パス (オレゴン街道) を通過し大陸西部を横断するルートである。西部への開拓はすでに始まっており、その自然な延長としてカリフォルニアが目指されたのである。大陸横断ルートでは、他に、ヒラGila川沿いを通して、メキシコに抜け、マサトランMazatlánから船

で北上するルートもあった。

船旅では、南米最南端のホーン岬経由で行く方法もあった。当時の船会社の宣伝ポスターをみると、110日ほどかかったことがわかる。途中、下船して中米やメキシコの地峡を経由する場合もゴールドラッシュ当初からあった¹²。金鉱発見のニュースは、米国人の移動先で知られるようになったため、通過地であるチリ、ペルーやメキシコなどからも新たに乗客が加わった。ゴールドラッシュによってカリフォルニアへ殺到した人々の出身地域は多様だった¹³。

次の表に示されているように、中米ではニカラグア経路がパナマ地峡と競合していたが、内戦とパナマ鉄道開通によって、ニカラグア経由は縮小した。オレゴン街道サウス・パス経由では、ゴールドラッシュ直後の1850年には4万人以上が移動した。パナマ経由の人数がサウス・パス経由を超えるのは1851年で、1854年以降は、一貫してパナマ経由の方が人気だった。パナマ鉄道の延伸と全線開通にしたがって、他のルートは魅力が失われていったのである。1848年から1860年までの総計でも、パナマ経由（21万8546人）がオレゴン街道サウス・パス経由（19万8000人）を上回っている。

表：ニューヨーク発カリフォルニア行き乗船者数とサウス・パス経路者数

	1849年	50年	51年	52年	53年	54年	55年	56年
ニカラグア経由	1,930	10,563	9,687	13,063	11,232	4,523
パナマ経由	6,489	13,809	15,464	24,231	17,014	18,445	15,412	18,098
サウス・パス経由	23,000	44,000	1,100	50,000	20,000	12,000	1,500	8,000

出所：McGuinness, *Path of empire*, p.7, Table 1をもとに、ニカラグア経路を付け加えて作成した。
John Haskell Kembel, *The Panama route, 1848-1869*, University of South Carolina Press, 1990, p.254, およびJohn D. Unruh, Jr., *The Plain across: the overland emigrants and trans-Mississippi West, 1840-60*, University of Illinois Press, 1993, pp.119-120.

12 移動の様子を比較的簡単に知るための邦語文献には、ウィリアムズ・ウェーバー・ジョンソン著タイムライフブックス編集部編『大西部物語フォーティナイナー』タイムライフブック、1976年、43-71頁、デイヴィッド・ハワース『パナマ地峡秘史』リプロポート、1994年、222-239頁がある。Mary Seacole, *Wonderful adventures of Mrs. Seacole in many lands*, (1857), Penguin Books, 2005, のほか、Theodore T. Johnson, *Sights in the gold region, and scenes by the way*, Baker and Scribner, 1850, など当時の旅行記の多くが現在ウェブ上で閲覧可能である。

<https://archive.org/details/sightsingoldregi00john>

13 太平洋を越えてくる中国人移民もこの流れに加わった。貴堂嘉之『アメリカ合衆国と中国人移民：歴史のなかの「移民国家」アメリカ』名古屋大学出版会、2012年。

パナマ鉄道建設と完成

「40年代末から50年代はじめにかけて、パナマ地峡での出来事はカリフォルニアでの出来事と密接に関係しており、ある観点では類似している」(p.5)。ゴールドラッシュのパナマでの米国人の移動は、パナマ鉄道が全線完成するまで、多くの困難を伴った。

パナマ地峡経由でカリフォルニアに向かう人は、東海岸から船で出発する。パナマ大西洋岸に到着した船は、遠浅のために、海岸からかなり離れた場所に碇を下ろす必要があった。沖合からパナマ地峡横断の出発点チャグレスChagresに到着するために、乗客はまず地元の人と交渉して、ボートに乗り換えなければならなかった。その後、地元の人が操作するボンゴbongoとよばれた小型ボート(丸木舟dugout canoes)でチャグレスChagres川を上った。チャグレス川を上りきると、次に、徒歩あるいはラバの背にのって移動しなければならなかった(p.33)。パナマ市までは、少なくとも三日、条件次第では10日以上かかる場合もあった。パナマ市に着いてからも、カリフォルニアへ向かう船が都合良く待ちかまえているわけではなく、場合によっては長い間待つ必要があった。

米資本によるパナマ鉄道の建設は、1850年、まずコロロン側から始められた。コロロンは、米国企業がラテンアメリカ各地に作ることになる米国の飛び地のなかで最初の町だったとマクギネスは指摘している(p.10)。コロロンではなく、アスピンウォールと呼ぶことが鉄道従業員や乗客では普通だった(p.82)。安全な通行を確保するためとして地峡警備隊Isthmus Guardが鉄道会社によって作られた。鉄道建設には、大量の建設労働者が必要だった。1853年時点での労働者数は、白人649人、ジャマイカ人およびクーリー160人、原住民1301人であった。翌年からは中国人も導入(ある資料では1040人)された(pp.70-71)。

鉄道建設の仕事は1855年2月の完成とともに消滅した。また、コロロンからパナマ市までの経路に存在した職業は、食事の用意や宿泊なども含め、鉄道建設の進展にしたがって徐々に失われていった。完成時には、パナマ鉄道は4時間ほどで大西洋と太平洋を結んだからである。さらに、海岸から沖合の大型船に乗客や荷物を運ぶという、最後まで地元民が関わっていたボート輸送の仕事も失われた。駅舎のある場所からは、海に突き出して長い栈橋が設けられ、その先端にはしけ船トバゴ号が常駐するようになったからである。この職に携わっていたのは、主にシエナガの住民であった。米国側の報告書では、「パナマ・スイカ事件」の原因は、この仕事に従事していた有色人の報復であると指摘し

ている (p.132)。また、本来銀細工師だと証言しているルナも経済的に困窮していた可能性がある。通常の場合、果物売りは女性が携わる職である。

乗客の側からみれば、パナマ鉄道での短時間の移動は、パナマ地峡での地元住民との接触が少なくなることを意味した。旅行中の困窮を描いた旅行記がたくさん出されたが、完成以降は記述が激減する。鉄道の完成によって、さまざまな困難に巡り会うポートヤラバでの冒険、パナマ人とのふれあい、あるいは、いざこざといった経験は徐々に少なくなっていった (p.83)。1848年12月から1856年はじめという短期間に、パナマ地峡は、ニューヨークとサンフランシスコをつなぐ単なる通過点となったのである (p.81)。

フィリバスター filibuster 侵攻のうわさ

パナマ市では鉄道全線開通以降、上記のような社会経済的状況の変化が生まれていた。では、なぜ、開通から一年以上たった1856年4月に争乱が生じたのだろうか。マクギネスは、パナマ側の証言を引いて、最も可能性のある理由は、フィリバスター侵攻のうわさであると指摘している。ここで言うフィリバスターとは、1850年から1860年に米国から私兵を率いて中米・カリブ海地域の内政に干渉した人のことである¹⁴。「アラバル住民のおおくは、4月15日の自らの行動を攻撃ではなく外国の侵攻から自らを防御する試みとしてとらえていたようである」(p.139)。4月初めにベル Horace Bellらにカラグアに向かうはずのフィリバスターを乗せたコルテス号がパナマ市に到着していた¹⁵。つまり、パナマ市に滞在中の米国人の中にフィリバスターがまぎれていると、このとき、うわさされていたのである。

1855年5月にサンフランシスコから私兵を率いてニカラグアに上陸したウォーカー William Walkerは、1856年4月11日、リバスの戦いで中米同盟軍に敗

14 フィリバスターは、19世紀末以降、議会運営を妨げるものの意味にも使われている。1850年、キューバに私兵500人を率いて干渉し、不首尾に終わったナルシソ・ロベス Narciso Lópezは、米国最初のフィリバスターとして名高い。ウォーカーの1853年メキシコ侵攻については、次の邦語文献がある。中野達司『メキシコの悲哀：大国の横暴の翳に』松籟社2010年の第三章。

15 コルテス号はバンダービルト Cornelius Vanderbilt が保有していた船である。このとき、バンダービルトはウォーカーとニカラグアのアクセサリー鉄道会社の所有権をめぐる争いになった。そのため、当初ウォーカーに合流する予定だった乗員は、急遽パナマ市に向かうことになった (p.125)。

北を喫したものの、同年7月にはニカラグア「大統領」に就任した。ニカラグアで進行していた事態を知っていたパナマの人々は、米国人によるパナマ奪取を危惧したのである。事件直後、4月16日には、コロン側からフィリバスターがやってくるといううわさがながれていたという記録も残されている (p.144)。

有色人に対する白人の偏見

一方、米国側で公式調査を依頼されたコーウィン Amos B. Corwine は、報告書の中で有色人の略奪や殺人に自然と進んでしまう傾向が事件の原因であると非難している。ルナのエスニシティについて本人の証言はないが、米国側の証言によれば「ニグロ」だったという。米国側報告書には、有色男性によって女性が暴行されたとの記述もある。同報告書では、婦人や子供の死体を見たとする証言も紹介されているが、そのような事実を確認する資料はないと、『帝国の経路』は指摘している (p.132, 136.)。

米国側の人種偏見を示すものとして、マクギネスは、この事件を描いたニューヨークの絵入り新聞 Frank Leslie's Illustrated Newspaper (5月17日) も紹介している (表紙カバーおよび p.157)。画像には、多数の群衆と刀をもった黒人が武器をもっていない白人の乗客に襲いかかる様子や略奪の様子のほか、海岸のボートの脇に二人の白人婦人が描かれている。そのうちのひとり、胸がはだけており、あきらかに群衆により襲われたことが示唆されている。

アラバルの住民の多くは米国人にはアフリカ系に見えた。マクギネスは、米国人ジャーナリストが1855年に記している次の証言を引用している (p.43)。スペイン系純血を誇っているパナマ市の数少ないエリート家族の場合でも「如才ないミシシッピの奴隷商人の目にかかるとは、ニグロをふるいわけする検閲を通過することはほとんどないと思う」¹⁶。1849年から鉄道が開通するまでの期間、米国人たちを運んだボートやラバでのパナマ住民との接触は、不快感を生じさせる場合もあったし、一方、旅の途中で地元民がオースザンナを歌うなどすると、まるでミンストレル・ショーを見ているかのような気分になり、人種差別に基づく滑稽さを楽しむ場合もあった (p.51)。国内で黒人奴隷制が禁止されていなかった時代、黒人差別を当然とする米国人がこの地域の住民を

16 Robert Tomes, *Panama in 1855*, Harper and Brothers, 1855, p.215からの引用である。パブリックドメインで全文が参照できる。

<http://hdl.handle.net/2027/nyp.33433081692067> (2017年1月4日閲覧)。

見下すことがあったとしても、不思議ではなかった。

人種偏見は白人系のパナマ人エリートにもあった。11月カルタヘナに逃れていた時期に、独立の英雄であったマリアノ・アロセメナMariano Arosemenaが子フストJustoに宛てた手紙には当時のパナマ知事カルボBartolomé Calvoについて次のように記している。身の安全を保障するという言葉はもらっているが、パナマに帰ることはできない。というのも、「オラウータンが権力の座についていると分かると思うだけでも、身の毛もよだつ」からだ (p.182)。第3節でみるように、カルボは、アフリカ系とされる保守党の知事であった。

ヌエバグラナダでは、自由党政権の下で、1852年1月1日、奴隷解放が行われた。パナマでは、500人ほどが対象だったという。また鉄道建設などのためにカリブ海地域から最近移住したアフリカ系労働者も多くいた。この事件のきっかけとなったルナと米国人との言い争いの背景には、有色人に対する白人の偏見があった。集団としてみた場合でも、この事件は、旅行者として通過する人々と地元住民との人種間対立の側面を無視できない。この点で、ウォーカーが、1857年4月にニカラグアで奴隷制を復活させたことは注意されてよい (p.181)。

3 パナマにおける米帝国U.S. empireの形成と「パナマ・スイカ事件」

「はじめに」で言及したように、『帝国の経路』の主眼は、「1856年パナマ・スイカ事件」そのものにあるのではない。事件は、パナマにおいて米国の帝國的領域が形成されるゴールドラッシュ時代の特徴を示す最も重要な出来事として取り上げられている。第1節、第2節でみたように、パナマは、このときゴールドラッシュのただ中にあった。同書は次のように指摘する。「パナマ史における出来事としてゴールドラッシュを見なすと、1840年代、50年代における『大陸部の拡大』さえも、いかに領土外つまり海外帝国〔での状況〕次第で決まっているかがよくわかる。パナマにおける米帝国の形成は、1848年以降続いたアングロアメリカによるカリフォルニア征服の副産物あるいは余波ではない。その征服の全体に組み込まれ、一体だった」(p.186) ([]は筆者)。

「パナマ鉄道によって形成された帝国」(p.192)の領域パナマにおいて、米国はこの事件をどのように処理していくのだろうか。

米海軍による最初の軍事介入

「パナマ・スイカ事件」から5ヶ月後、ビドラック-マリヤリーノBidlack-

Mallarino条約を理由にして、冒頭で述べたように、1856年9月19日から22日に米海軍による最初の軍事介入がおこなわれた (p.173)。

ビドラック-マリヤリーノ条約とは、カリフォルニアへの安全な通路を確保するために、1846年12月、米国政府がヌエバグラナダ政府と結んだ条約である。同条約では、ヌエバグラナダが米国人の通行を保証するかわり、米国はパナマの主権をヌエバグラナダに保証するとした。当時イギリスは、パナマ地域が「モスキート王国Mosquito Kingdom」の領域に含まれるとしていたため、イギリスによるパナマ要求を妨げる目的であった (p.29)¹⁷。グアダルルーベ・イダルゴ条約締結以前のことで、ゴールドラッシュ以前だったことを考えると、カリフォルニアへの経路確保の切実さがうかがわれる¹⁸。

米国は、「パナマ・スイカ事件」の発生に呼応して、1856年4月22日、セントメリー号をパナマ湾に派遣した。さらに8月31日、マーヴィンCommodore William Mervine指揮下の太平洋艦隊旗艦インディペンデンス号を合流させた (p.168)。この間、パナマ州知事選挙をめぐる自由党と保守党との間の争いで、自由党を支持する黒人系の人々の暴動のうわさがたっていたからである。簡単に経緯をまとめておく。

州知事選挙は6月29日におこなわれた。自由党ディアスDiazと保守党カルボが候補者であった。9月15日に投票結果発表が予定されていた。自由党が黒人たちをけしかけて、反対派を襲わせようとしているとのうわさが流れた。アラバルの黒人たちは城壁内に入ったが、米軍艦の動静を見て退却したと新聞は伝えている。城壁内の住民らの多くが、セントメリー号に逃れた。このとき、自由党支持者であったアロセメナー族もセントメリー号に逃れている (pp.167-8)。

9月18日、保守党カルボが圧倒的な差で勝利したと議会で報告された。19日、

17 「モスキート王国」は、1816年、ニカラグア大西洋岸の先住民ミスキートMiskitoであるジョージ・フレデリックGeorge Frederick二世王の戴冠式をイギリスがベリーズでおこなって以来、イギリスの保護領protectorate化が進んでいた。Craig L. Dosier, *Nicaragua's Mosquito shore: the years of British and American presence*, University of Alabama, 1985, pp.33-34.

18 グアダルルーベ・イダルゴ条約 (1848年) とは、米メキシコ戦争の終結の際に米メキシコ間で結ばれた条約である。1848年に金鉱が発見されたアルタ・カリフォルニアAlta California (バハ・カリフォルニアすなわちカリフォルニア半島部分はメキシコ領として維持された) がこの時米国領となった。本小論では、慣例に従って、アルタ・カリフォルニアの領域をカリフォルニアと呼んでいる。

アラバルの住民が暴動をおこす準備をしていることが確認できるとして、保守党の副知事ファブレガFábregaが在パナマ市米領事サブラSabla（パナマ出身）に米戦艦の海岸接近を要請した。マーヴィン自身も副知事に許可を求めて海兵隊160名を上陸させ、駅舎を掌握させた。結局、22日、マーヴィンは部下に船に戻るよう命令し、発砲はなかった（pp.171-172）。

ビドラック-マリヤリーノ条約を理由にした1856年9月の米国介入は、最終的には、コロンビアからパナマ分離（1903年）を可能とさせた正当化の論理としても使われることになったと、マクギネスは指摘している（p.190）。1903年の出来事は、1856年にその原型がすでに準備されていた。

「パナマ・スイカ事件」を巡る政府間交渉

事件の補償交渉において、米国側は、統治権に関わる要求をもちだした。海軍用地としてパナマ湾の五島を買い取るという提案もしている（p.157）。また、パナマ市とコロン、およびトランジット・ルートを中立地帯とする提案がおこなわれた。トランジット・ルートとは、パナマ鉄道の両側それぞれ10マイルの中立地帯を設け、それを米国が保証するものとされている（p.158）。20世紀のパナマ運河史において登場する米国の主権が及ぶところとされたキャナル・ゾーン10マイルは、このときすでに提案されていたのである。

パナマ市やコロンを中立地帯とするとは、ニカラグア大西洋岸のサンファンデルノルテ（別名グレイタウンGreytown¹⁹ジャマイカ総督Greyに由来）を前例とするものと米国はボゴタ政府に説明した。グレイタウンは、「自由港」であり、ニカラグア政府から独立した港で、米国人を中心とした住民による自治を認めているとした。望厦条約や日米和親条約（神奈川条約）で米国が獲得した利権を踏襲したものであり、米メキシコ戦争における領土獲得とは異なるものだった。米国は、領土としてではなく支配権の及ぶ領域拡大を目指していく²⁰。

-
- 19 イギリスは、1848年、グレイタウンを占拠した。翌年ニカラグア政府は米国にニカラグアを横断する独占通行権を与える条約を結ぶ。1850年代には、米国のフィリバスター行為の拠点となる。1854年には米国・イギリス住民間の対立が激化した。1850年クレイトン-ブルワー条約の解釈を巡る争いでもあった。米国とイギリスの勢力圏争いについては、Dosier, *Nicaragua's Mosquito shore.*, pp.76-106、が詳しい。
- 20 別稿で論じた「曖昧な領域」のひとつと見なすことができる。佐藤勘治「20世紀転換期米メキシコ国境地域の「曖昧な領域」性:モルモン教徒メキシコ移住とピリャ懲罰遠征隊」『境界研究』第3号（北海道大学スラブ研）、2013年。

ペリー来航により日本と神奈川条約が結ばれたのは1854年、清朝との間で望厦条約が結ばれたのが1844年であり、両者は不平等条約であった（p.158）。

ヌエバグラナダ政府は、主権侵害にあたるとして、これらの提案について交渉に応じなかった。両国は、米国人の生命財産に対する損害賠償として41万2393ドル95セントをヌエバグラナダが米国に支払うことで合意し（p.190）、1857年9月10日にエラン-カスHerrán-Cass合意が結ばれた²¹。

この時期、米国は、東海岸から太平洋岸への経路確保をパナマ地峡だけでなく追求している。1853年には、サウスカロライナ鉄道元社長ジェイムズ・ガズデンJames Gadsdenをメキシコ大使に任命して交渉させ、メシーリャ Mesilla 地域を1000万ドルでメキシコから購入することに成功している。メキシコ改革戦争において、自由主義派は米国に支援を求めたが、1859年には、支援の見返りとして、米国人のテウワンテベック地峡の永久通行権を保障し、さらに米国人の生命・財産に被害が生じたばあい米国の干渉を認める条約を締結している。マクレーン-オカンボMcLane-Ocampo条約である。この条約は1860年に米国上院で否決され、批准されなかった²²。

4 「ラテンアメリカ」概念の登場

「はじめに」でふれたように、『帝国の経路』によれば、事件は「ラテンアメリカ」概念の登場にも関係している。この節では、この用語の成立に関するこれまでの議論を簡単に紹介した上で、この用語がパナマにおいて使われたとき、「ラテン」アメリカとして何が対象とされていたのか整理しておきたい。

フランス帝国主義起源説

「ラテンアメリカ」という地域名称の起源については、近年まで広く影響力をもった解釈があった。1968年にフェランJohn Leddy Phelanが著わした論文

21 英文原文を以下で参照できる。United States, Department of State, *Treaties and Other International Agreements of the United States of America, 1776-1949*, pp.888-892. <https://archive.org/details/treatiesotherint01unit> (2017年1月4日閲覧)

22 メキシコ改革戦争においても、パナマ鉄道は重要な役割を果たしている。1858年、改革戦争がはじまると、フアレスらは首都を脱出し、形勢不利の中グアナファートなどを転戦して、3月、太平洋岸マンサニエリヨ港から船に乗船、パナマ鉄道経由で大西洋岸のベラクルスに移動した。5月には、ベラクルスに政府を確立、以後、ベラクルスを拠点に戦っている。

「汎ラテン主義、フランスによるメキシコ干渉とラテンアメリカ概念の誕生」に基づくもので、汎ラテン主義者のフランス知識人がナポレオン三世によるメキシコ干渉を正当化するために使い始めたとする解釈である²³。

フランスがイギリス、スペインとともにメキシコの債務不履行をきっかけにメキシコ出兵（三国干渉）したのは、1861年12月である。前年まで、メキシコでは、保守派政府と「改革（レフォルマ）」を進める自由主義派政府の二つの政府が併存し、内戦となった。「改革戦争」、あるいは三年間で終結したため「三年戦争」と呼ばれている。「三年戦争」の結果は、自由主義派の勝利だった。自由主義派は1861年1月1日首都メキシコ市を奪還した。保守派はナポレオン三世のフランスに援助をもとめた。メキシコ出兵のもうひとつの理由である。イギリス軍、スペイン軍は62年初に撤退した。フランス軍は軍を増強して自由主義派政府と戦いを続け、63年には首都を落とした。以降、以下のような、メキシコ皇帝マキシミリアンのよく知られた悲劇が続く。

ナポレオン三世は、首都に臨時政府を設置したメキシコ保守派の要請に応じて、1864年、メキシコ皇帝としてハプスブルグ家のマキシミリアンをフランス軍とともに送り込んだ。首都から逃れた自由主義派政府は北部フアレス市（当時の名称はパソデルノルテ Paso del Norte）に拠点を移して、米国からの支援を受けながら抵抗を続けた。ヨーロッパ情勢の悪化により、1866年11月フランス軍は撤退した。自由主義派政府軍は巻き返しに成功した。残されたメキシコ皇帝は、1867年、銃殺刑に処された。

上記、メキシコ干渉の正当化論理として、メキシコはフランスと同じ「ラテン系」の国家であるとする考えがフランス国内でもちだされたのである。この考えを広めたのは、ナポレオン三世の政策に大きな影響を与えたラテン主義者シェバリエ Michel Chevalierだとされている。

トールス＝カイセドの「ラテンアメリカの人種」

しかし、近年、上記の説が見直されている（p.153）。「ラテンアメリカ」と

23 John Leddy Phelan, "Pan-latinism, French intervention in Mexico (1861-1867) and the genesis of the idea of Latin America," in Ortega y Medina, Juan A. ed. *Conciencia y autoridad histórica*, UNAM, 1968. 名称の成立を巡る議論については、中川文雄「ラテンアメリカ地域の特徴」国本伊代・中川文雄（編著）『ラテンアメリカ研究への招待（改訂新版）』新評論2005年、25-28頁が紹介している。

いう言葉を使い始めたのは、パリ在住の南米旧スペイン領出身の知識人作家の団体であるとする説である。チリ出身の自由主義者ビルバオFrancisco Bilbaoや詩人トーレス=カイセドJosé María Torres Caicedo (1830年ボゴタ生まれ)などが候補となっている²⁴。いずれもフランス人知識人より以前のことである。時期については、1856年が初出ではないかもしれないが、1856年こそが別れ目の年だと、マクギネスは指摘する²⁵。

ウルグアイの哲学者アルダオArturo Ardaoが唱えた説を紹介しよう。アルダオは、「ラテンアメリカ」を初めて使った人物はパリ在住の詩人トーレス=カイセドであるとした。トーレス=カイセドは、1856年9月の詩（発表は翌年）「二つのアメリカLas dos Américas」の第9節第1連に、「サクソンの人種」と並べて「ラテンアメリカの人種」という言葉が現れている²⁶。ただし、他の節では、「南アメリカ」あるいは「スペインアメリカ」という言い方も現れており、用語が確定されているわけではない。他の節では、ウォーカーによるニカラグア侵攻が言及されている部分もある²⁷。

この用語をトーレス=カイセドが使ったのは、米国との差異を強調することで、米国の影響力拡大を批判するためであった。したがって、この用語がフランスによるメキシコ干渉の正当化に使われることになったとしても、当然である。しかし、重要なことは、フェラン説とは違って、数年後に始まるフランスによるメキシコ出兵を支持することを意図してはいないということである²⁸。

24 トーレス=カイセドについては、柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』新宿書房2007年が詳しい。

25 Aims McGuinness, “Searchig for ‘Latin America’: Race and Sovereignty in the Americas in the 1850s”, in Nancy P. Appelbaim, Anne S. Macpherson, and Karin Alejandra Roseblatt, ed., *Race and Nation in Modern Latin America*, University of North Carolina Press, 2003, p.99.

26 詩のうち、「ラテンアメリカ」が現れる部分は、柳原による翻訳がある。柳原『ラテンアメリカ主義のレトリック』57-58頁。また、98頁にはスペイン語原文が掲載されている。

27 Arturo Ardao, *Genesis de la idea y el nombre de América Latina*, Centro de Estudios Latinoamericanos Romulo Gallegos, 1980, p.179.「中米は侵略され／地峡は絶え間ない脅威に晒され／そして海賊ウォーカーが支援を受けるのは／北の国、裏切り者の国から」（第6節第2連）。

28 誰が最初にこの用語を使用したのかについては、いまだ確定はしていない。誰が初めて使用したかは重要ではないだろう。しかし、自分がその一員だと見なすが、どのような背景で、いつ頃から使い始めたか、「ラテン」という言葉に何が込められたのかを知ることは重要である。

シェバリエのラテン人種論は、イギリスを初めとするヨーロッパ諸国の帝国主義的覇権争いのなかでフランスが特別な位置を占めようとする意図を前提としたものだった。米国の領土拡大に対する対抗心は、その前提の上で表明されたものである。非難しているわけではなく、対抗しているにすぎない。しかし、一方、トーレス=カイセドの場合、拡大の対象とされる土地の内部の人間として、他のラテンアメリカ出身の知識人とともに、あくまでも米国の動きを敵として見定めていた。自称なのか他称なのかは、本質的な差である。

柳原孝敦は、トーレス=カイセドの1850年代から1860年代における論考を「ラテンアメリカ主義」の先駆として位置づけている。しかし、「ラテンアメリカ主義」において、トーレス=カイセドは「時宜を逸していた」とも指摘している。「ラテンアメリカの人々がいまだ合衆国を敵と見なしてはおらず、旧宗主国スペインの幻影に取り憑かれていたところに、敵は合衆国だと宣言したのだから」。この時期、敵は米国と定まってはならずスペインの脅威もまだ現実的だったとする²⁹。しかし、前節までに論じてきたように、少なくとも、19世紀半ばのパナマにおいては、「敵」が合衆国であることは明らかだった³⁰。

「パナマ・スイカ事件」と「ラテンアメリカ」

テキサス共和国の独立と合衆国併合、カリフォルニア・アリゾナ・ニューメキシコなどの獲得、中米・カリブ海におけるフィリバスター行為の横行など、19世紀半ばの南北アメリカにおける米国の影響力拡大は、パリにいたトーレス=カイセドにも、ひしひしと感じられるものだった。ウォーカーのニカラグア侵攻と米国によるウォーカー・ニカラグア政権承認はそのひとつである。では、「パナマ・スイカ事件」のニュースは、パリに届いていたのだろうか。

祖国ヌエバグラナダの中央部からは遠く離れているとはいえ、歴史的にも通商上も重要性をもっていたパナマでの出来事「パナマ・スイカ事件」はトーレス=カイセドの意識のうちにあったと、マクギネスは『帝国の経路』において言及している (p.161)。『帝国の経路』には、トーレス=カイセドの言葉が引かれていないので、筆者が確認できた範囲で、確認しておこう。

トーレス・カイセドは、「二つのアメリカ」作詩の数ヶ月前、1856年6月、

29 以上、柳原『ラテンアメリカ主義のレトリック』63頁。

30 ニカラグアなど周辺地域に対するイギリスの影響力は、徐々に弱まっていた。1850年には、米英間でクレイトン-ブルワー条約が結ばれている。

「スペインアメリカ諸国家連合Confederación de las naciones de la América española」をパリで出版、米国の勢力拡大に対抗してスペインアメリカの団結を呼びかけている。そこでは、コロンとパナマ市にそれぞれ200名の軍隊駐留を米国が要求していると紹介され、その原因が、パナマ人hijos de Panamáが殺人者を罰したことにありとする。たとえ正義が米国の方にあるとしても、こうした要求は不当であると断じている³¹。不正確ではあるが、「パナマ・スイカ事件」を指しているのは明らかである。「ふたつのアメリカ」の創作時、トーレス＝カイセドの脳裏には、ニカラグアだけでなく、自国の出来事も浮かんでいたのである。

この事件は、ヌエバグラナダ国内でも議論を巻き起こし、パリでと同様に、「ラテン」人種や「ラテンアメリカ」という考えが展開されていく。マクギネスは、パナマ連邦州選出のヌエバグラナダ上院議員フスト・アロセメナJusto Arosemena Quesadaの論をあげている。第2節で紹介したマリャノ・アロセメナの子である。1855年にパナマが連邦州として自治権を確保した際の自由党の政治指導者であった。パナマ自由党にとって、南北戦争直前の米国は、他地域を併合して奴隷制を復活させることになるかもしれない存在であった。保守党はそれに加担する可能性があった。既に述べたように、米国の承認を受けていたニカラグア政権は奴隷制復活を宣言していた。以下、『帝国の経路』とマクギネスの他の論考に沿ってアロセメナの主張を紹介する³²。

アロセメナは、「パナマ・スイカ事件」発生時には、パナマ市にはいなかった。しかし、すでに見たように家族は事件に大きな影響を受けていたし、この事件をきっかけとして始められた米政府との交渉は、連邦上院議員アロセメナ自身の問題であったはずである。56年7月にボゴタの自由党系雑誌El Neogranadinoに発表された「アメリカの問題とその重要性La cuestión americana i su importancia」では、アロセメナは、現地から、そして当事者として、「ラテンアメリカの利害intrés latinoamericano」という用語を用いて、その重要性を展開した。アロセメナは、米国によるニカラグアのウォーカー政権承認、日本へのペリー将軍の派遣、米国人の指揮する地峡警備隊の残虐行為

31 Ardao, *Genesis*, p.174.

32 筆者は以下の文献に再録されたアロセメナの原文にあたることはできていない。Justo Arosemena, *Escritos de Justo Arosemena: Estudio introductorio y antología*, Argelia Tello ed., Editorial Universitaria, 1985.

などを挙げながら、「反ウォーカー戦争と4月15日事件をめぐる外交論議を『アメリカ大陸』そして世界の将来を巡る『ヤンキー人種raza yankee』対『ラテン人種raza latina』間の戦いという、時代を画するより大きな全体的紛争の一部であると描いている」(p.160)。「ラテンアメリカ」という考えが、ほぼ同時に、遠くはなれたトーレス＝カイセドと共有されていたことがわかる。

しかし、誤解しそうになるが、アロセメナは「パナマ・スイカ事件」そのものを米国人対パナマ人という枠組みで見えていない。上記の引用箇所も、あくまで事後処理をめぐる外交折衝についての記述であることに注意しなければならない。アロセメナによれば、この事件は、偶発的のだとして、次のように述べる。「(乗客との争いにおいて)パナマ人は当事者ではなく、当事者は別の国出身者、なかでもアンティル諸島出身の新参者の少数の黒人である」(p.160)。つまり、事件は米国人と最近やってきたアフリカ系の人々と米国人乗客との紛争だとするのである。事件の背景として、第2節で、米国人の有色人に対する人種的偏見とそれへの有色系地元住民の憤りがあると指摘したことである。これはアロセメナの考えと一致しているかにみえる。たしかに、アロセメナは、米国人のアフリカ系の人々に対する態度について非難している。しかし、彼自身はパナマ人であり、有色人の当事者ではないわけだ。

ラテン人種は、魂が崇高で、英雄的、騎士道精神にあふれ、高貴で感性豊かであるのに対して、ヤンキー人種は、実利主義であり、冷たく、腐敗しているとアロセメナは指摘する (p.160)。また、トーレス＝カイセドと同様に、汎ラテン統合の呼びかけもしている。こうした点では、フランスでの動向と一致している。

マクギネスの分析によれば、アロセメナが述べる「人種」(原語ではraza)とは民族性nationalityに近い概念で、生物学的な意味で固定化された性格のものではないとする。肌の色という肉体的特徴よりも価値観が重視されている。しかし、ラテン人種の団結という枠組みからは、ヤンキー人種だけでなく、明確にアフリカ系の西インド出身者は排除され、先住民については言及されていないと指摘されている。ただし、アフリカ系や先住民が文明化されれば、彼らのラテンアメリカへの将来の統合は可能だとアロセメナは見なしていると『帝国の経路』は判断している (pp.162-3)。

別の論文において、マクギネスは、「ラテンアメリカ」概念は今日に至るまで様々に人種化されてきた、そして、その言葉の成立において人種と統治権を巡る争いとの関連が見いだせると整理している³³。19世紀半ば、この言葉がヌ

エバグラナダでおそらく初めて使われたとき、パリでと同様に、「ラテンアメリカ」からアフリカ系と先住民は排除されていた。しかし、アロセメナの例で示したように、パリとは違って、その指し示す場所だったからこそ、アフリカ系と先住民を排除していることを意識せざるを得なかったのである。

おわりに

この小論では、「1856年パナマ・スイカ事件」を軸に、『帝国の経路』から二つの論点を主に取り上げてきた。ひとつは、パナマを米帝国拡大史の枠組みで論じるとき、19世紀半ばのゴールドラッシュ時点からはじめるべきであるという主張である。「・パナマは、植民地化されたわけではなかったが、帝国領域empiresを一体化し生き延びさせるために必要であった。パナマは、19世紀半ばにおいて米国の植民地ではなかった。しかし、1850年代までに出現した〔帝国の〕秩序はパナマ州とヌエバグラナダの主権を間違いなく侵害し、その秩序形成は、同時期のカリフォルニアや米国国境内のあらゆる地域の地元民、土地、資源の征服と密接に関係し合っていた」(p.190)。(〔 〕内は筆者)。もうひとつは、「ラテンアメリカ」という考え方の出現である。この二つは、もちろん密接に結びついている。マクギネスは、結論において、次のように述べている。「米国は、19世紀において拡大した唯一の場所ではない。政治的想像力の領域においてではあるが、ラテンアメリカもまた拡大した」(p.192)。

『帝国の経路』が説得力をもって示したのは、帝国である米国および「ラテンアメリカ」が、帝国支配下に編入されたパナマにおいて両者の相互関係から同時に出現したということである (p.204)。19世紀半ば以降、パナマ以外の地域においても同様の過程が進行することになる。筆者が研究対象としてきた米メキシコ国境地域でこの過程が進行するのは19世紀末からである。当然のことであるが、米メキシコ国境地域では、メキシコと米国は相互規定的にそれぞれの領域を実質化していくことになる。ただし、メキシコは米国領土と接しているため、特に強調されたのはメキシコ人意識であった。米メキシコ戦争 (1846-1848年) の時点でも同様だったと考えられる。それがメキシコから「ラテンアメリカ」が立ち現れなかった理由であろう。

最後に、「ラテンアメリカ」という用語がその後どういう歴史をたどっているのかを付け加えておきたい。「ラテンアメリカ」という用語は、その出現か

33 MacGuinness, "Searching for 'Latin America'", p.102.

ら20世紀半ば国連の使用する地域名称として定着するまで、普及することはなかった。ブラジルやアルゼンチンでは、最近までこの用語が自らを示すものとして一般化していなかったという³⁴。現在、日本では、ラテンアメリカは、カリブ海地域をも含めた地域名称として一般的に使用されている。地域名称と認識される限りでは、この用語の人種的含意は無視されることになる。

しかし、前節で見たように、この用語がヌエバグラナダに登場した19世紀半ば、誰がラテン人種なのか、誰がラテンアメリカ人なのか、自らの問題として問われなければならなかったのである。19世紀半ばのパリにおいてはラテン人種という用語が指し示す対象者は明確であったろう。また、パリであってもヌエバグラナダであっても、ラテンアメリカ人と自らをみなす人が語る場合、ラテン人種が団結して急激に拡大する米国に対抗するべきだという思いが込められた用語であった。しかし、ヌエバグラナダにおいては、米国人とアフリカ系だとされる地元住民との間で生じた「パナマ・スイカ事件」がひとつの背景だったことから分かるように、はじめから人種性を帯びるイデオロギー的概念であった。おそらく、だからこそ、この用語は長い間、純粋な地域名称とはなり得なかった。

ミグノロWalter D. Mignolo『ラテンアメリカとは何かThe idea of Latin America』は、ラテンアメリカという「考え」方の帝國的・植民地的基盤を明らかにすることを目的に掲げた研究である。「ラテンアメリカ」は、植民地時代の初めからすでに始まっていたインディアンとアフリカ系の不在を再生産するために19世紀半ばに採用された名前であったとする³⁵。本小論で述べてきたことを、ミグノロの主張にそって言い換えれば、米帝国の成立を隠すためにラテンアメリカという名前が採用されたと言うことができる。そして「ラテンアメリカ後After 'Latin' America」と題された第三章では、現在、「ラテン」アメリカの先住民、アフリカ系住民の運動と米国ラティノLatinos/asの運動があらたな知のプロジェクトをもたらし、ラテンアメリカという考えを時代遅れにしていると主張している。不在は、顕在化したわけである。

興味深いことに、現在、「ラテン」あるいは「ラテン系」という言葉のニュ

34 Leslie Bethell, "Brazil and 'Latin America'," *Journal of Latin American Studies*, vol.42, 2010を参照のこと。現在でも、スペインでは公式文書でこの用語は使われないという。中川「ラテンアメリカ地域の特徴」、27頁。

35 Walter D. Mignolo, *The idea of Latin America*, Blackwell, 2005, p.57.

アンスは、用語が登場した時代から反転している印象がある。地域名称として定着したことが前提となって、「ラテン」という言葉からは「ラテン系民族」ではなく、こんどは「ラテンアメリカ」の現在の住民がまず思い浮かぶようになってきている。白人、先住民、アフリカ系およびそれらが様々に混じり合う人々である。アジア系の要素も想起されるかもしれない。米国では「ラティノ」という用語がそのような意味合いをもって使われ始めているようにも思える。言葉そのものが、本来の意味を離れて一人歩きすることは、よく見られることである。

ラテンアメリカという考えは、ミグノロが指摘するように時代遅れになったのだろうか。そうだとしたら、それに代わる考えはどのようなものだろうか。

付記：この小論は、獨協大学国際教養学部の佐藤担当講義「ラテンアメリカ近現代史」において、ここ数年論じてきた「1856年パナマ・スイカ事件」に関する講義内容をもとに執筆したものである。